異文化（間）コミュニィケーションとは何か

佐藤保

目次

一、コミュニィケーションとは何か
二、文化とコミュニィケーション（verbal および non verbal の両分野）
三、意味と文脈
四、言語と社会――「精密コード」と「制限コード」
五、異文化（間）コミュニィケーションとは何か
①サピア・ウォーフの仮説の創造的再解釈
②日米のコミュニィケーション・スタイルの違い――verbal および non verbal の両分野
③結論――異文化（間）コミュニィケーション研究の目的と意義――コミュニィケーションのパラドックス

一　コミュニィケーションとは何か

カリフォルニア州立大学教授 Dean C. Barnlund 氏は〈コミュニィケーションの方程式f〉を

If understanding is a measure of communicative success, a simple formula――which might be called the *Interpersonal Equation*――may clarify the major factors that contribute to its achievement:

Interpersonal Understanding＝f（Similarity of Perceptual Orientations, Similarity of Belief Systems, Similarity of Communicative Styles）

That is, "Interpersonal Understanding" is a function of or dependent upon the degree of "Similarity of Perceptual Orientations," "Similarity of Sys-

tems of Belief," and "Similarity in Communicative Styles."[1]

右の様に示している（*Public and Private Self in Japan and the United Sateles*（1975, Simul Press）。つまり、理解の度合いがコミュニィケーションの成功率を示す尺度であるとすれば、

個人間の理解度＝f（知覚定位の類似性、所信体系の類似性、意思疎通形式の類似性）〈Similarity of Perceptual Orientations〉とは、人が現実に対処するときどのようなアプローチをとることが多いか、またその現実を系統だてる際どれほど適応性を示すかを指す。

〈Similarity of Systems of Belief〉は、人びとがどのように世の中を見るかという点ではなく、自分の体験からどのような結論を引き出すかという点を示す要素である。

〈Similarity of Communicative Styles〉とは人びとが話し合いたがる事柄や好まれる意思伝達形態、つまり儀礼的であるか、当意即妙の機知あふれるやりとりであるか、議論か、打ち明け話であるかという好みや、相手にどの程度深く関わり合いを求めるかという点を意味する。どれだけ共通の語いを使うか、またどれほど似たような比ゆを好んで使うかといったことが、人が理解し合うのに役立つといえるだろう。

ここで強調しなくてはならないのは、これら三つの要素はそれぞれ分離されて存在したり単独に機能するものではないということである。これらの要素は互いに重なり合って影響し合っている。そして複雑に組み合わさって行動を決定している。

個人間方程式を構成する項は三つの分離した変数ではなくて、相互依存の変数である。それは意思伝達行為を分析するために用いる三つの視点となるのである。

最後にコミュニィケーションと言語の関係については筆者は、『〈文化としての言語学〉は可能か』（和光大学人文学部紀要第二九号（一九九四））において人間における、言語と認識と意味の関係は言語的コミュニィケーションの成立にとっていかなる意味を持っているかという視点から、〈言語的コミュニィケーション〉について、次の様に述べたことがある。（p. 235より引用）

「人間の意識は、現実を直接的に、感性的にのみ反映するものではない。それは言語に結晶された人類の社会

的経験を媒介とする間接的な、現実の屈折された反映である。しかし、その意識はどのようにして形成され、発達するのだろう。人間は、一人ぼっちの存在として自分のまわりの現実を反映し、一般化するのではない。人間は、実際にはわずか数年のあいだに、人類が数千年の経験、何億回となく繰り返された実際経験を基にして発見した現実の複雑な諸関係の、認識に到達する。これらの人類の長い経験、現実についての深い認識は、言語、科学――言葉の意味の体系――のなかに一般化され、体系化されている。だから、人間は、言葉の習得を通じて、このような認識に到達する。しかしその言葉の意味は、一挙に把握されるものではない。

言葉が現実の一般化であると同時に、コミュニィケーションの手段であるということは、このさい、重要な意味をもつ。一般化と交通あるいはコミュニィケーションとは、相互に内面的に結びついた過程である。人間は、他人を媒介として、つまりコミュニィケーションの過程を通じて、現実の世界と関係する。ところで、その言語的交通は一般化なしには不可能である。そして、すべての言葉が一般化なのである。

したがって、言葉の意味の習得、いいかえるなら、概念、さらには意識全体の発達は、このようなコミュニィケーションの過程の具体的状況のなかで解明されなければならない。

意識の発達は、その第一歩から言語的コミュニィケーションの発達と結びついている。その過程で人間は言葉の意味＝現実についての知識を獲得するのである。

だが、同一の言葉がAとBとでは、ちがった意味をもつ。ある言葉によってAが頭に描くことと、その言葉によってBが考えることとは、必ずしも一致しない。それにもかかわらず、AとBとのあいだにコミュニィケーションが成りたつのはなぜか。それは、両者の使う言葉の意味は、このようにして一致しないにしても、それらの言葉が客観的に存在するある具体的な対象を指示するという点では一致するからである。対象指示という点では、両者の言葉は一致し、同一の対象を指示する。このことは、AとBとの言語的コミュニィケーションを可能ならしめるものは、まさに客観的な現実であるということを示している。客観的現実との相互作用が存在するときにのみ、言語的コミュニィケーションは可能となるのであ

る。」

II　文化とコミュニケーション（verbal および non verbal の両分野）

文化とコミュニケーションの関係は切っても切れない関係にあることは言うまでもない。このことは異文化（間）コミュニケーションにおいては、独協大学教授石井敏氏によれば左の様に定義される。

COMMUNICATION AND CULTURE LINKED

The link between culture and communication is vital to understanding intercultural communication. It is through culture that people learn to communicate. A Japanese child learns to communicate like other Japanese and that child's behavior can convey meaningful messages because it is learned and shared. In other words, it is cultural. The child sees the world through the concepts, categories, and label's that are products of the Japanese culture. So the ways in which people communicate, including language patterns, style, and non-verbal behaviors, are culturally determined. As cultures differ one from another, the communication practices also differ.(2)

しかしながら、青山学院大学教授本名信行氏によれば、コミュニケーション・スタイルにおける差異は絶対的評価の対象となるべきものではない。例えば、文化人類学者の E. T. Hall は *Beyond Culture* (1976) で次の様に述べている。

Nevertheless, the study of our past as well as our present fails to confirm Freud's view that humans advance and build institutions through a process of sublimation of sexual energy. This book suggests another alternative, namely that once people began evolving their extensions, particularly language, tools and institutions, they got caught in the web of what I term "extension transference" (Chapter 2), and as a consequence, they err in judgment and become alienated from and incapable of controlling the monsters they have created. In this sense, humans have ad-

vanced at the expense of that part of themselves that has been extended, and as a consequence ended up repressing human nature in its many forms. Man's goal from this point should be to rediscover that lost, alienated natural self.[3]

つまり、人間は文化を発達させたが、いつのまにかそれに束縛されてしまっている。自分の創造したモンスターを制御できずに、その命令を受ける存在と化してしまったのである。いま、人間に求められていることは、〈本来の全面性〉をとりもどすことである。

このことは、なにも自分の文化を捨て去ることではない。それは自分の「文化を超えて」、自分の隠れた次元を発見することである。異文化コミュニィケーションはこのための努力にほかならない。それはまた、このための努力の必要性を認知するきっかけを与えてくれるのである。例えば、E. T. Hall の分析概念である（三意味と文脈を参照）、High-context Communication（状況依存型コミュニィケーション）の民族・文化（日本・中国など）と Low-context Communication（言語依存型コミュニィケーション）の民族・文化（アメリカなど欧米諸国）はお互いにそれぞれのコミュニィケーション・スタイルを捨て去るのではなくて、お互いどうしそれぞれのスタイルから学び合うこと（つまり、人間として〈本来の全面性〉をとりもどすこと）が出来るはずである。——→「五 ③結論——異文化（間）コミュニィケーション研究の目的と意義」を参照のこと。また、独協大学の石井敏氏によれば、文化および異文化コミュニィケーション（論）研究とは次の様に考察される。

「人が生まれてくることは、既存の文化のうちに生まれ、属することを意味する。人類の誕生の時点を別にして、人びとが生活を共にし、種族の存続がはかられると、そこに自然、社会環境との共存を目指した彼ら独特な生活様式が創られ、それに修正が間断なく加えられつつ後代へと伝えられて行く。これが文化であるなら、人はみな特定文化のうちに生まれてくるといえよう。誕生にまつわるもろもろの行事、育成過程、遊び、学び、働き、すべてがその共同体が長い時間をかけて形成してきた努力の結実としての文化の要素である。このように考えられた文化は、多種の自然的、人工的環境に対する一共同体独特の反応の複合体で、

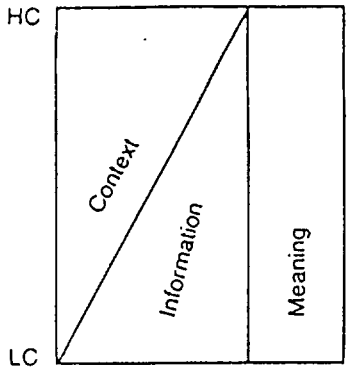

Figure 1

そこには一貫した論理性がある。生き方、感じ方、考え方、価値観、表現の仕方、行動様式などは、間断ない環境との調整結果なのであって、調整は論理的一貫性の形成過程といえよう。文化はこの論理的一貫性のゆえに文化なのである。すなわち、文化は閉ざされた世界であることが、その特徴の一つだともいえる。

となると、異なる文化に所属する人びとの間のコミュニケーションには二つの面があることになる。一つには、異文化という環境との調整は生き方としてのコミュニケーションにとって特別なことではなく、当り前な自然なことで、騒ぎたてることもない。人間を含めた諸生物は、その歴史を通じてまさにこの調整をおこなって生存してきたのである。あと一つは、各文化の論理的一貫性と閉鎖性の観点から、この調整としてのコミュニケーションが多難であろうということである。これらの二つは、環境との多難な調整として一つの異文化コミュニケーション現象の両面をなしている。異文化コミュニケーションが近年学問の対象として研究されるようになったのは、この後者の経験にうながされた反省に由来することがそれを立証している。(4)」

三　意味と文脈

Edward T. Hall は *Beyond Culture* (1976) の中で、意味と文脈について、次の様に述べている。

Although no culture exists exclusively at one end of the scale, some are high while others are low. American culture, while not on the bottom, is toward the lower end of the scale. We are still considerably above the German-Swiss, the Germans, and the Scandinavians in the amount of contexting needed in everyday life. While complex,

multiinstitutional cultures (those that are technologically advanced) might be thought of as inevitably LC, this is not always true. China, the possessor of a great and complex culture, is on the high-context end of the scale.

Any transaction can be characterized as high, low-, or middle-context [Figure 1]. HC transactions feature preprogrammed information that is in the receiver and in the setting, with only minimal information in the transmitted message. LC transactions are the reverse. Most of the information must be in the transmitted message in order to make up for what is missing in the context (both internal and external).

In general, HC communication, in contrast to LC, is economical, fast, efficient, and satisfying; however, time must be devoted to programming. If this programming does not take place, the communication is incomplete.(5)

つまり、HC Communication（状況依存型コミュニィケーション）かLC Communication（言語依存型コミュニィケーション）かは正に各民族の文化的特性（ethos）に大きく左右され、決定づけられているからである。（cf. 佐藤保、和光大学人文学部紀要第二七号、一九九二）

Edward T. Hallの言語（使用）に対する分析概念から言えることは**社会構造の変化や相違、そして文化の違いが言語（使用）に大きな影響を及ぼす**という考え方である。

（四　で述べるBasil Bernsteinのelaborated codeとrestricted codeについても同様のことが言える。）

帰結は、きわめて明確であり、言語はつねに、「思惟」「観念」「思想」「文化」「道徳」「政治」として働く上部構造だということである。また、これこそが、マルクスとエンゲルスの言う「言語は意識と同じだけ古い――言語とは、実践的な意識であり、他の人間たちのためにあってこそ、はじめてまた、私自身のために現存する現実的な意識であり、そして言語は意識と同じく他の人間たちとの交通の必要、必須ということからこそ成立する。(6)」

（『ドイツ・イデオロギー』）の意味するところのものではないのか。

「そして言語は……他の人間たちとの交通の必要、……成立する。」はそのまま「コミュニケーションとは何か」に引用した〈コミュニケーションの方程式f〉(Dean C. Barnlund) がいささかpragmatismの社会学からの傾向性を持った規定であるのに対し、〈コミュニケーション〉をマルクス主義哲学の立場から全人間的、歴史的、全面的に解明したものとして信頼するに足る。我々はコミュニケーション論の大きな足場、土台を『ドイツ・イデオロギー』のこの引用部分 (p. 59) に置きたい。

四　言語と社会――「精密コード」と「制限コード」

The view to be taken here is different in that it will be argued that a number of fashions of speaking, frames of consistency, are possible in any given language and that these fashions of speaking, linguistic forms, or codes, are themselves a function of the form social relations take. According to this view, the form of the social relation or, more generally, the social structure generates distinct linguistic forms or codes and *these codes essentially transmit the culture and so constrain behaviour.*(7)

イギリスの社会言語学者、B. Bernsteinは「サピア・ウォーフの仮説」――主としてWhorfによって主張された言語決定論――を批判して、上述の様に、社会的な関係あるいは社会構造こそが言語のあり方 (linguistic forms or codes) を産み出し、また、これによってその文化が伝達され、従って行動にも制約が持たされると主張しているが、

The thesis to be developed here places the emphasis on changes in the social structure as major factors in shaping or changing a given culture through their effect on the consequences of fashions of speaking. It shares with Whorf the controlling influence on experience ascribed to 'frames of consistency' involved in fashions of spe-

aking. It differs and perhaps relativizes Whorf by asserting that, in the context of a common language in the sense of a general code, there will arise distinct linguistic forms, fashions of speaking, which induce in their speakers *different* ways of relating to objects and persons. It leaves open the question whether there are features of the *common culture* which all members of a society share which are determined by the specific nature of the general code or language at its *syntactic* and *morphological* levels. It is, finally, more distinctly sociological in its emphasis on the system of social relations.(8)

つまり、それは社会構造の変化こそがある文化を形成し、変化させる主因（原動力）だとする考え方であり、それによって同一言語内（言語共同体）においても、対象や人間に対する異なった関係を引き起こす可能性のある、異なった言語のあり方があり得るということなのである。

On this argument language is a set of rules to which all speech codes must comply, but which speech codes are generated is a function of the system of social relations.

The particular form a social relation takes acts selectively on what is said, when it is said, and how it is said. The form of the social relation regulates the options which speakers take up at both syntactic and lexical levels.(9)

また、それは社会的関係のあり方が諸個人の言語使用（何を、いつ、どのように、発話するかということ）に作用し、彼あるいは彼女の統語および語い上の選択を規定しているということなのだが、それは言語能力（Communicative competence）に関して述べているD. Hymesの次の主張とも完全に合致する。すなわち、Edward Sapirの弟子でもある、Dell H. Hymesは、Chomskyを批判した後、次のように言っている。"...a normal child acquires knowledge of sentences, not only as grammatical, but also as appropriate. He or she acquires competence as to when to speak, when not, and as to

what to talk with whom, when, where, in what manner.[10]"

また、B. Bernstein は以下の様に、

Individuals come to learn their roles through the process of communication. A role from this point of view is a constellation of shared learned meanings, through which an individual is able to enter into persistent, consistent and recognized forms of interaction with others. A role is thus a complex coding activity controlling the creation and organization of specific meanings *and* the conditions for their transmission and reception. Now, if it is the case that the communication system which defines a given role behaviourally is essentially that of speech, it should be possible to distinguish critical roles in terms of the speech forms they regulate. The consequences of specific speech forms or codes will transform the environs into a matrix of particular meanings which becomes part of psychic reality through acts of speech. As a person learns to subordinate his behaviour to a linguistic code, which is the expression of the role, different orders of relation are made available to him. The complex of meanings which a role-system transmits reverberates developmentally in an individual to inform his general conduct. On this argument it is the linguistic transformation of the role which is the major bearer of meanings: it is through specific linguistic codes that relevance is created, experience given a particular form, and social identity constrained.

Children who have access to different speech-systems (i. e. learn different roles by virtues of their status position in a given social structure) may adopt quite different social and intellectual procedures despite a common potential.[11]

社会的諸関係における、個人個人の役割が言語使用における、意味の創造とその伝達や受容の条件を規定しており、個人個人の役割の違いによる言語使用の違いこそが主たる意味の源泉だというのである。また、一定の社

会構造における、地位によって、異なった役割を身に付けた子供達は共通の潜在能力を持っているにもかかわらず、かなり異なった社会的・知的な成長の段階をたどることがあり得るということであり、その事は次の様に、同一社会（言語共同体）内に、言語使用における2つのコードが存在するという考え方に発展するのである。

Elaborated and restricted codes: definitions and brief description

Two general types of code can be distinguished: *elaborated and restricted*. They can be defined, on a linguistic level, in terms of the probability of predicting for any one speaker which syntactic elements will be used to organize meaning across a representative range of speech. In the case of an elaborated code, the speaker will select from a relatively extensive range of alternatives and the probability of predicting the organizing elements is considerably reduced. In the case of a restricted code the number of these alternatives is often severely limited and the probability of predicting the elements is greatly increased.

On a psychological level the codes may be distinguished by the extent to which each facilitates (elaborated code) or inhibits (restricted code) an orientation to symbolize intent in a verbally explicit form. Behaviour processed by these codes will, it is proposed, develop different modes of self-regulation and so different forms of orientation. The codes themselves are functions of a particular form of social relationship or, more generally, qualities of social structures.(12)

「精密コード」(elaborated code) は、身ぶりや顔の表情などの副言語的要素にたよることが少ないとされる。また、言いまわしの精密さ、さらにつぎにどのような言いまわしがなされるか、その予測がしにくい点が特徴的だとされる。

これにたいし「制限コード」(restricted code) は、コミュニケーション状況に大きく依存しており、しかもその状況はたがいにはっきり言わなくても相互に了解できるような条件をつくっているのである。そして、きま

り文句が比較的多く、つぎにどういう言いまわしがなされるか、予測が容易である点が特徴的なのである。また、中産階級の子供たちは「精密コード」も「制限コード」も使用できるのにたいして、労働者階級の子供たちはしばしば「制限コード」しか使用できない傾向があるとされている。このように、B. Bernstein の elaborated code と restricted code が主として同一社会・民族（言語共同体）内における言語使用を分析するのに有効な概念であるのに対し、Edward T. Hall の high-context（状況依存型）communication と low-context（言語依存型）communication の概念は前者にきわめて類似した考え方だと思われるが、やはり社会・民族間の言語使用の分析に使用される時に、きわめて有効な概念だと考えられる。

五　異文化（間）コミュニィケーションとは何か

①「サピア・ウォーフの仮説」の創造的再解釈

Human beings do not live in the objective world alone, nor alone in the world of social activity as ordinarily understood, but are very much at the mercy of the particular language which has become the medium of expression for their society. It is quite an illusion to imagine that one adjusts to reality essentially without the use of language and that language is merely an incidental means of solving specific problems of communication or reflection. The fact of the matter is that the "real world" is to a large extent unconsciously built up on the language habits of the group… We see and hear and otherwise experience very largely as we do because the language habits of our community predispose certain choices of interpretation.

——Edward Sapir

There will probably be general assent to the proposition that an accepted pattern of using words is often prior to certain lines of thinking and forms of behavior, but he who assents often sees

in such a statement nothing more than a platitudinous recognition of the hypnotic power of philosophical and learned terminology on the one hand or of catchwords, slogans, and rallying cries on the other. To see only thus far is to miss the point of one of the important interconnections which Sapir saw between language, culture, and psychology, and succinctly expressed in the introductory quotation. It is not so much in these special uses of language as in its constant ways of arranging data and its most ordinary everyday analysis of phenomena that we need to recognize the influence it has on other activities, cultural and personal.[23]

この見解は「サピア・ウォーフの仮説」という名前でも知られているように、アメリカの言語学者で文化人類学者のサピアやウォーフによって提唱されたものである。

そのテーゼは要するに、言語のちがいが、人びとのものの見方、考え方、さらにまた行動の仕方や態度に決定的に影響している、と考える見解である。

この見解にも強弱いろいろニュアンスがあるが、そのうちでもっともラディカルなものはウォーフの考え方であろう。彼は異なった言語は根本的に異なった世界観をつくり出すというのである（言語決定論）。

しかしゆるやかに理解された言語相対論（主としてサピアの考え方）――すなわち、言語のちがいがわれわれの知覚・思考・態度等に一定の影響を及ぼす（決定するというのではなく）という見解――は、正しいと思われる。

従って、「サピア・ウォーフの仮説」をゆるやかに理解して〈言語相対論〉の立場に立つならば、正にその各母（国）語という上部構造を規定しているのが（労働）生活や生産関係や生産様式という下部構造なのであるという理論に結合・深化・発展させることが可能なのではないだろうか。また、これによりB. Bernsteinや D. Hymesらの社会言語学で言われている理論とも合致させることが出来るのである。つまり、「言語には社会的関係が作用し、何を、いつ、どのように発話するかということに働きかけるのである。」(Dell Hymes, 1974)

「従って、「サピア・ウォーフの仮説」、つまり、**各母**

(国) 語が各民族の思考様式を決定する（言語決定論――主としてWhorfの主張）は逆に、**各民族の思惟が言語に反映しており、またその思惟は生活によって規定されている**、と創造的に再解釈されるべきであることを筆者は一つのテーゼとして主張したい。[14]」

（「〈文化としての言語学〉は可能か」、p. 242）cf.（①B, Bernstein, 1971　②尾関周司、一九八三　③マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』大月書店、一九六五、p. 59　④田島富江、一九九四）

②日米のコミュニィケーション・スタイルの違い――verbalおよびnon verbalの両分野

カリフォルニア州立大学教授Dean C. Barnlund（『日本人の表現構造』、一九七九）は、「人間の性格と社会構造は相互に切っても切れない関係にある、という前提がある。個人と社会は互いに前件と後件である。つまり、人は一人ひとり社会の創造者であると同時に、あきらかにその産物でもある。個人の行為は否応なしにその文化の枠内におかれており、また文化の規制力は個人の行為から生まれている。そこで人間の実情調査の出発点として社会の筋道からたどり始めようと、個人からたどり始めようと、結局同じ現実にたどりつくことになる。本論文は社会の最も日常的な行為、つまり人間が自分の実在を主張して、他の人間から成る社会に結びつけるために用いる、さまざまなメッセージを調査して社会を理解する一助にしようと試みたのである。[15]」という立場、観点に立脚して、日米のコミュニィケーション・スタイルの違いを以下の様に分析している。

「日米二つの文化の違いは、あれやこれやの技術的な細部にあるだけではなく、人間社会におけるコミュニケーションの役割に対するあきらかに異なった考え方から派生していると思われる。それぞれの文化におけるコミュニケーションを描写することばでさえも、この考え方の違いを反映している。一方の文化で絶えず考慮にいれることは、調和を求めること、形式の重要性、感情を抑えること、共感を培うこと、気分を合わせること、儀礼に事欠かぬようにすること、意見（コンセンサス）の一致を求めること、全体を保つことなどである。意見の不一致は全体のムードを台無しにするから、気のきかぬことなのである。もののの見方や語彙は本質的に〈審美的〉である。相互作用は、内面および外面上の共鳴を得るための伝達手段であ

る。もう一方の文化にあるものは、洞察と真実の追求、独立心を養うこと、相違点を探求すること、対立は好ましいと思うこと、議論の尊重、創造的発見を刺激すること、そして妥協を通じて現実に沿った結論に到達すること、などである。ここでは、全員異議なしの合意がありすぎたとしたら、それは停滞を意味しており、それでは改良のための刺激を除外することになる。ものの見方と語彙は、本質的に〈実用主義的（プラグマティック）〉である。コミュニケーションは個人、あるいは社会の業績への道具とみられている。

人間の相互関係に関するいずれの考え方も、日米両方の社会に存在している。だが、そのいずれが優勢であるかは、文化によって変わるように思える。日本では、コミュニケーションは和を保つのに適しており、米国では和を乱すのにより適しているようだ。[16]」

あるいは、筆者には日本の（古い世代の）人々は情念に縛られすぎている様に思えることがある。そのことが正確な（科学的な）コミュニィケーションの大きな障害の一つになっているのではなかろうか。あるいはそのことが、国民の間に憎悪を生み出すことすらある。

「すべての文化は、人びとが体験を解釈して相手に伝える方法、いわゆる「談話の領域」を作り上げようとする。知覚を何らかの共通体系にコード化しない限り、生活は不条理なものになり、互いに意味を伝え合おうとしても、失敗に終ってしまうことになる。この談話の領域は文化的遺産の最も貴重なものの一つであるが、それは一部は意識的に、一部は無意識的に世代を経て伝達されるものである。親や教師は、服装、思考、ジェスチャー、他人の行動に対する反応などをほめたり批判したり、はっきり口に出して教育を授ける。しかし文化のコード体系の最も意義のある面はそれとなく伝達され、規則とか教訓でなく、行動の模範によって伝えられるのである。子どもをとり巻くさまざまな人は、それぞれ男性としてあるいは女性として、母親、父親として、店員、巡査として一貫した振舞いをしており、そうした一貫性のある行為を通して何が適切な行動かを示している。そのようにしてどの文化でも、その文化圏内の法則は、その大半が無意識のうちに伝達され、受容され、そのために自分自身の文化的前提を認知することが困難である。それらはあまりにも当たり前に見えるので、説明を必要としな

いのである。[17]」

日本文化は日本人にしか理解出来ない（日本人が一番良く理解している）などということがいかに、思いあがり・錯覚・幻想かということは以上で明らかであろう。

「（日米）両者の間の大きな相違を考えてみよう。

日本は天然資源のきわめて少ない小さな島国で、周期的に天災に見舞われ、人口が過密であり、地理的に他国から隔離されていると同時に、文化的にも自ら好んで他から離れており、神道と仏教によって育まれ、自然への深い敬愛の念がゆきわたっており、人生観は唯物的でなく、思考が直観的であり、社会構造は階層的である。情緒的な表現としては、明白な表現や途方もなく重々しく巨大なもの、大胆さやばか騒ぎなどを避けて、非の打ちどころのない庭園やいなかの簡素な寺、左右非対称形の生け花、類例のないほど感情のこもった演劇、すばらしく優美な美術と文学、そして誠実さと素朴さで有名な工芸、などの形をとるのである。

その国民は世界民族のなかで最も均質的であり、態度は控えめで弁解的であり、心情に訴える曖昧なことばで話し、個人間の儀礼的な面に没頭し、相手に影響を与えるよりは自分の内面的な平安を望むのである。木と紙の簡素な建物に居を定め、農村の道と同じくらい無計画に町並みが広がっている都市に住んでいる。そしてこのような田畑から突如として工業の巨人が現われ、何十年間も工業の経験をもち、より多くの資源と技術陣を備えた競争者でもある他の国々をしのぐようになっている。労働者は、世界のどこの労働者よりも長い時間、無我夢中になって働いて、世界最大の都市を建設し、最も醜いビルを建造し、最もけばけばしい、くどい宣伝を大々的に行ない、想像を絶するほど空気と水を汚染している。

一方アメリカという国は、広大な国土に人口が希薄で、豊かな資源に恵まれ、つぎつぎにやってくる移民によってヨーロッパの伝統と結ばれているが、生きてゆくためには自然を征服して、新しい解決策を発見しなければならない。ユダヤ教・キリスト教的伝統の中にひたり、ヨーロッパの抽象的分析的思想によって教育され、物事の見方は物質的であり実験的である。哲学的には実用主義、政治的には平等主義、経済的には競争主義であるが、むき出しの個人主義は、時には相手に対する人道主義的配慮によって緩和されている。都市は幾何学的な形をして

いて、街路に沿って鋼鉄とガラスの塔がそびえ立ち、その中は個別の部屋に仕切られて、個々の人びとが個別に活動するようになっている。大衆芸術といえば、シネマスコープの大きさ、ジャズの即興、ロックの粗野な大音量、などにその性格が現われている。また美術においては、実験的な面や、目を見はらせるもの、規模の大きさなどが、微妙な表現を打ち消してしまう場合がよくある。

そして国民は多くの民族、宗教、方言、国籍などの寄せあつめであり、表現は表情たっぷり外に向けられ、儀礼や規則にはがまんできず、気軽で軽薄であり、論理と議論にたけ、率直で近づきやすいが、派手な誇張した口ぶりで断言する傾向がある。お互い同士に対して好奇心が強く、開放的で助け合うが、互いを自分の思うように変えようとする、宣教師的熱意を示すのである。ところが、国力と自信をもって知識面と政治面で世界の支配的な地位に立ち、その生活様式が世界中に浸透しているこのアメリカは、突如として進む方向に不安をおぼえ、自国の前提とする概念や価値観を疑い始め、その動機や物質主義を反問し、そして自己批判の嵐に突入しているのである。

――中略――

このような異文化同士の出会いから生ずる危機が非常に重大となったり、対話者がことのほか敏感な場合は、そもそも何から問題が出たのか、根源をつきとめられるかもしれない。忍耐と建設的意図があれば、問題を究明して事態を明らかにできる場合が多い。しかし、たいていの場合は、部外者が知らぬうちに不安、不信、そして「自分自身ではまったく気がつかない」憎悪までをも相手に与えてしまうのである。どちらも、その困難さが、各自の社会内の表現法に深く根ざす源から生じていることを認識しない。そして互いに、自分がまったく理にかなっていて、正直で思慮深く行動しているつもりでいる。もちろん自分の談話の領域内の規則からいえば、そのとおりやっているのだが、不幸にして文化的な普遍性の面は少なく、コミュニケーションのコードを共有している面は常に不完全である。体験を正確に伝える唯一の場合は、各コードの特有の内容が認識され尊重されているか、それを何らかの方法で整列しようとする、意図と方法が存在している場合だけである。[18]」

③結論――異文化（間）コミュニィケーション研究の目

的と意義――コミュニィケーションのパラドックス

「人間社会が分裂しないようにすることと、その社会の一人ひとりの構成員のもっている潜在能力を十分に実現しようとする努力という点では、現代文明は躓いているのではないかという疑念が広がっている。人間的コミュニケーションの質の低さに対する絶望は、今日の主要なテーマのひとつである。

――中略――

外側の対話なしには、自己の内面での対話はあり得ないし、また、そういう内面の対話なしには、外側の他者との対話もあり得ない。精神とか心は、社会的孤立状態において成長するのみならず、他者の精神や心と相対するのを通して成長する。鏡に映った己の姿や、自分自身の投影にすぎない人からは、心の糧となるものはたいして得られない。ここにコミュニケーションのパラドックスがある。つまり、人が互いに似ていればいるほど、両者の関係は気楽で努力せずにすむが、一方では互いに学べることがより少なくなる。ところが、互いに異なれば異なるほどその関係にとまどい、それに対処する意欲にかられる。だがそのために、互いにおおいに学べるのである。隣人の目を通して自分自身を見ることはよい刺激となるが、自分自身を、文化を異にする人の目を通して眺めることは、まさに「目の開かれる」経験である。それは、文化的偏狭さに囚われている身を解き放つだけではなく、世界をまったく新しい方法で経験させてくれるのである。

私たちの国を分かつ国境は、もはや私たちの心の境界線ではない。他の国々の人が感じることや知っていることを、私たちが理解しその真価を正しく評価するようになるのは、きわめて重要であり、おそらく場合によっては、人類生存のカギを握る問題であろう。この種の人と人との共感は、人間の視野を広げ、個人あるいは文化全体として成長する機会を倍増するのである。[19]」

また、青山学院大学教授本名信行氏によれば日米コミュニケーション・スタイルの違いとは次の様にまとめることが出来るのである。

「日本人は、自己評価テストで、“reserved”（内気）とか“silent”（無口）という項目に同意し、アメリカ人は“talkative”（おしゃべり）、“self-assertive”（自己主張的）、あるいは“frank”（率直）という項目に同意す

る。それは各個人の事実を表明したものでもあるだろうし、価値観を反映したものでもあろう。

それぞれのコミュニケーション・スタイルは、それぞれの文化的・社会的背景に根拠をおくので、簡単に変更するわけにはいかない。しかも、以心伝心はそれなりに有意義であり、また明示的・直接的方法もそれなりに必要である。日本人もアメリカ人も、おたがいの交流のなかで両方の様式を学習するようになれば、人間関係をより豊かなものにつくりあげることができるであろう。」(20)（『文化を超えた伝え会い』、一九九三）

ここで留意すべきことは、このような異文化（間）コミュニィケーション研究の発想・方法論とは比較文化（論）研究と同様に、日米の両文化型（cultural patterns, cf. E. C. Stewart）を足して2で割るという様な中庸（中道）型の方式とは無縁であり、あくまで弁証法的統一を目指すものであるということで結語としたい。

(1) Dean C. Barnlund, *Public and Private Self in Japan and the United States*, Simul Press (1975) pp. 11-12
(2) Donald W. Klopt, Satoshi Ishii, *Communicating Effectively across Cultures* Tokyo; Nan'un-Do (1984) pp. 20-21
(3) Edward T. Hall, *Beyond Culture* (Garden City; N. Y.: Doubleday & Company, 1976) p. 4
(4) 吉田暁監修『異文化コミュニケーション』（一九八七）有斐閣 p. 272
(5) Ibid. p. 91
(6) マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』大月書店（一九六五）p. 59
(7) Basil Bernstein, *Class Codes and Control* (*Volume 1*) (Roulledge & Kegon Paul) (1971), p. 122
(8) Ibid. p. 123
(9) Ibid. pp. 123-124
(10) D. H. Hymes, "On Communicative Competence," in J. B. Pride and J. Homes, eds., *Sociolinguistics* (Hamonds worth, Middlesex: Penguin Books, 1972), p. 277
(11) Ibid. pp. 124-125
(12) Ibid. p. 125
(13) Caroll, J. B. (ed.) *Language, Thought, and Reality —Selected writings of Benjamin Lee Whorf—* (The MIT Press, 1956), pp. 134-135
(14) 佐藤保、「〈文化としての言語学〉は可能か」和光大学人文学部紀要第二九号（一九九四）p. 242
(15) D・C・バーンランド著、西山千・佐野雅子訳『日本人の表現構造』一九七九（株）サイマル出版 pp. 9-10

(16) Ibid. p. 202
(17) Ibid. p. 19
(18) Ibid. pp. 21-24
(19) Ibid. pp. 208-210
(20) 本多信行、『文化を超えた伝え会い』開成出版（1993）p. 28

――参考文献――

(1) Edward C. Stewart, *American Cultural Patterns : A Cross-cultural Perspective*, (1972), Intercultural Press
(2) 佐藤保、「比較文化の思想と英語教育」、和光大学人文学部紀要第二七号、一九九二
(3) D. H. Hymes, *Foundations in Sociolinguistics*, (University of Pennsylvania Press, 1974)

（一橋大学講師）